

「光あるうちに光の中を歩め」というトルストイの短い小説があります。この小説は、ユリウスという欲望、野心、名声を求めて俗世間で成功した商人が、世の中で成功をおさめても満たされることがないことを知り尽くし、友人であるパンフィリウスの影響を受けて、長い魂の遍歴の末に、キリスト教の道に入ります。今まさにキリスト教に入信しようとしているユリウスが、病気に罹りそれを診るためにやって来た医者との意見を交わしているのです。医師は、理性に立ち帰って考え直すように、キリスト教がいかに自らを欺く宗教であるかと説得している場面の言葉です。

「…あのソフィストたちはつまり人間と神に対する反逆者ですな。彼らは幸福な生の道を唱道している。そうした生の道というのは、あらゆる人間が幸福になるような、一戦争も、死刑も、貧困も、放蕩も、争闘も、憎悪もなく、なるような一生活様式を意味するのだそつです。そしてあの連中は、世の人々がキリストの戒律を履行し、争わず、放埒に走らず、誓いもせず、暴力も振るわず、民族が民族と敵対しなくなるべきに、人類は今宣べたような状態に到達すると主張しているのです。あの連中は目的を手段と見なしている点で、誤っているか、もしくは自分を欺いているのですよ。彼らの目的は、争いもしないし、誓いもしないし、放蕩にも耽らない、…と言うのだが、しかしこの目的は、社会生活の方法によって初めて達成されるのです。」

…だからあの連中の言っていることは、弓術の師匠が弟子に向かって、おまえの矢が一直線的な目をかけて飛ば

ときに、初めての射を射ることができると、教え諭すのおなじです。矢をまっすぐに飛ばよようにするには、いったいどうしたらよいか、ここに問題があるのです。この目的は、弦が強く引き絞られ、弓に弾力がつき、矢がまっすぐに構えられたときに初めて達成されるのです。人間の生活もこれとおなじです。争う必要も放蕩する必要も、殺戮し合う必要もないような最上の生活は、弦―支配者、弓の弾み―権力、まっすぐの矢―法の公正、―これらの要素の揃った時、達成されます。しかるに、あの連中ときたらよりよい生活を口実にして、生活が改善したもの、また、改善しつつあるものを、すべて破壊しています。あの連中は、支配者も、権力も、法律も認めないのです」

この医者がユリウスに語りかける言葉で、キリスト教徒の生活を揶揄していますが、それはローマ帝国の社会における支配者、権力、法を破壊する、皇帝、元老院、ローマ法をまったく顧みない生活を営んでいるということです。

この原型を、福音書のイエスに見ることができます。ユダヤの支配者たち、祭司長、律法学者たちをもっともしい、むしろ力ある指導者たちに論争を挑んでいるのです。そしてユダヤの法をも廃するのです。

12 イエスは再び言われた。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」

詩編と箴言にそれぞれ次のような言葉があります：

「あなたの御言葉は、わたしの道の光／わたしの歩

みを照らす灯。(詩119:105)」「戒めは灯、教えは光。懲らしめや諭しは命の道。(箴6:23)」

ですから、イエスはご自分こそは、神の言葉であり、人生の道を歩むためになくはならない光だとおっしゃるのです。だから、もはや律法の戒めは廃された、わたしを信じて、生きる拠り所としなさいとおっしゃるのです。

そつは言っても長年拠り所にしてきたいせつな価値観、ユダヤの法を棄ててわたしに従えと言われても、幼い時から教え込まれてきた律法、生きる支えをそつ簡単に捨て去ることはできません。

確かな根拠が示されるなら、まだ話を聞くこともできるでしょう。しかしイエスは、ただ自ら「わたしは世の光である」すなわち律法に取って代わる新しい戒めであるとおっしゃるのです。ひとりだけではない、神もわたしのことを真理であると証言なさっていると言われるのです。(17〜8節)

13 それで、ファリサイ派の人々が言った。「あなたは自分について証しをしている。その証しは真実ではない。」14 イエスは答えて言われた。「たとえわたしが自分について証しをするとしても、その証しは真実(真理)である。自分がどこから来たのか、そしてどこへ行くのか、わたしは知っているからだ。しかし、あなたたちは、わたしがどこから来てどこへ行くのか、知らない。15 あなたたちは肉に従って裁くが、わたしはだれをも裁かない。16 しかし、

もしわたしが裁くとすれば、わたしの裁きは真実である。なぜならわたしはひとりではなく、わたしをお遣わしになった父と共にいるからである。17 あなたたちの律法には、二人が行う証しは真実であると書いてある。18 わたしは自分について証しをしており、わたしをお遣わしになった父もわたしについて証しをしてきたのである。」

ただイエスおひとりだけが、証言者である、その証言が真理であることを受け入れるかどうか、それはイエスが「どこから来てどこへ行くのか」を知っておられるということをもって保証されているとおっしゃいます。つまりイエスは「神のもとから来られて、神のもとに行かれる」と言われるのです。問題は、神がどこにおられるのかということに収斂されているのです。

19 彼らが「あなたの父はどこにいるのか」と言うとき、イエスはお答えになった。「あなたたちは、わたしもわたしの父も知らない。もし、わたしを知っていたら、わたしの父をも知るはずだ。」20 イエスは神殿の境内で教えておられたとき、宝物殿の近くでこれらのことを話された。しかし、だれもイエスを捕らえなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。

タルムードには、「神の使いは人間の使いとは違う。人間の使いは使命を果たした後自分を派遣した人のところへ戻るが、神の使いは派遣された先に出頭する。(ヨブ 38:25) …つまり神の使いは「出」へ出かけていくことも神の臨在の前にある。これからしてシェキナ(遍在の神)は

至る所にいる」と記されています。

わたしたちが神の存在を知ることができない、あるいは求めることもないとすれば、おそろしく、神などいてもいなくともかまわないほど、満たされているか、苦しみ悩みが深く神を見ることができないかのどちらかでないかと思えます。

フランクが度々言い及んでいる事例ですが、なぜ戦時下のアウシュヴィッツでガス室に送られていくひとびとが、ユダヤ教徒ならば「シエマの祈り」を唱え、キリスト者ならば「主の祈り」を唱えながら、上を向いてガス室に入っていくことができたのでしょうか？「主の祈り」では、「…乙女マリアより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ…」と唱えます。

イエスのお生まれは、離婚騒動(ヨセフの離縁)、家もなく旅をしながら宿屋の家畜の飼い葉桶、公の生涯はすなわち迫害、そして十字架の死、…厳しい事情で世の命をうけて、厳しい環境のもとで成長し、もしもその生涯の終わりにおいても、苦難の中にあるひとがいるならば、それはイエスとおなじ生涯をたどっているのであり、そこに絶えず神は共におられたことを確信させる祈りなのです。

神のもとから来られて、神のもとに行かれるイエスの、わたしたちが確かめることができる地上の生は、馬小屋から十字架の苦難の道であり、そこに神が共に折られたのです。